長野県社会福祉士会 NEWS

第197号
2023/7/1

発　行▶公益社団法人長野県社会福祉士会
会 長　吉 澤 利 政
事務局▶〒380-0836長野市南県町685-2
長野県食糧会館6F
編　集▶広報編集委員会
発行部数▶2,400部

TEL▶026-266-0294　FAX▶026-266-0339　E-mail▶info@nacsw.jp　HP▶https://nacsw.jp/

contents

巻頭言　豊かな学びとつながりで自己実現をめざす仲間として
新体制のもと県士会の活動にご協力をお願いします　……1
長野県社会福祉士会 新役員選出!!　……2～3
社会福祉士のためのICT“使ってみた”セミナー　…3
2023年度 福祉まるごと学会　……4～5
特集 私の考える社会福祉士、社会福祉士会とは　……6～7
リレーエッセイ、信州ぐるっと!!　……8
今後の予定・入会状況・編集後記　……8

巻頭言

豊かな学びとつながりで自己実現をめざす仲間として 新体制のもと県士会の活動にご協力をお願いします

吉　澤　利　政（長野県社会福祉士会　代表理事・会長）

新たに会長に就任しました吉澤です。会員歴は長いですが、会活動にあまり積極的に関わってこなかった者が会の重責を担って良いのか大きな不安があります。これまで長きにわたり障がい者や子どもの施設等の現場で仕事をしてまいりました。その経験を活かし、皆様からご支援をいただき、微力ながら精いっぱい努めさせて頂きますので、ご協力よろしくお願い申し上げます。

長野県社会福祉士会は、昨年度設立から30年を迎え、日本社会福祉士会の設立宣言にある「援助を必要とする人々の生活と人権を擁護すること、そのために社会的発言を強化すること」が私たちの最大の使命であることを改めて確認しました。

社会福祉士は、現在福祉（高齢、障がい、児童）の現場にとどまらず、医療、保健、行政、司法、教育、企業等さまざまな幅広い分野で活躍しています。現在会員は1200人近い大きな組織となっています。しかしながら加入率が全資格者の４分の１程度であり、特に20代の占める比率が全体の５％と低い状況です。今後若い人たちの仲間をいかに増やしていけるかが大きな課題だと思っています。

一昨年に、20代の若い会員たちから社会福祉士会に対する意見を聴く場がありました。その中で、「敷居が高く参加しづらい」とか「介護職についている者は、相談援助職から遠い感覚があり、社会福祉士会の活動にあまり参加しないのではないか？」等の意見が出されました。若い人たちの意見をはじめ多様なアイデアを積極的に取り入れ、より身近に感じられ親しみやすい、魅力ある会組織、活動を目指し取り組みたいと考えます。

今、少子高齢化が進み不安定な雇用形態、単身世帯やひとり親家庭、生活困窮世帯の増加等さまざまな課題が私たちの身の回りに降りかかっています。また、さまざまな場面で効率性が求められ、自己責任が問われるゆとりのない社会が進んでいます。同時にコロナ禍で、直接的な人との関わりが制限される中で分断と孤立が加速しました。立場の弱い人たちへのしわ寄せが強まり、格差が一段と進んでいます。

私たちが日頃かかわる全ての人たちの権利が守られ、安心して暮らせる状況になっているのか？　私たちの目の前で起きている課題を個人の問題として片付け、法制度や業務の枠中で仕方ないと諦めてはいないか？　私たちには、援助を必要とする人々の生活と人権を守るために自ら行動し、実践の中で制度を変え、社会を動かしていく役割が求められています。

県士会には、多様な学びの場があり多分野で活躍する仲間がいます。そしてつながり、共に行動する仲間がいます。皆さんとともに、一つ一つの積み重ねで県士会の更なる歴史を刻んでいきたいと思います。

長野県社会福祉士会　新役員選出！！

2023年度の定時総会は、去る６月３日㈯に正会員644人（委任状含む）が出席し、開催されました。総会の議決事項では、2022年度収支決算および次期役員（理事・監事）の選出を行いました。また、2023年度事業報告及び予算について報告がありました。定時総会終了後の臨時理事会では、代表理事・会長に吉澤利政、副会長に長戸桜子、原智美を選出しました。

選出された役員については次のとおりです。

新役員（理事・監事）の抱負

副　会　長

長戸　桜子（第１指名副会長・全県選出理事）

理事メンバーが大きく変わったことを機に、今までのやり方にこだわらず、新しい風を取り込む。そして、コロナ禍の制限から解放され、集合出来る機会を確保し、ICTを活用するなど効率的な会運営の在り方や社会福祉士の仲間がつながり、活発でより専門性の高い活動が出来るように力を尽くしたい。

原　　智美（第２指名副会長・全県選出理事）

これまで地域福祉やまちづくりに携わってきたが、課題は多岐にわたり、一人ではできないことを実感し、分野を越えてさまざまな立場の方々と地域課題解決に向けて、対話を繰り返しながら取り組んできた。その経験を活かし、以下のことに取り組んでいきたい。

・誰もが安心して暮らすことができる地域に向けて、一人ひとりが、現場で活躍できるよう、会員同士、また専門職等のネットワークづくりの促進。
・社会、地域課題を、住民とも一緒に考え取り組んでいけるよう、会の活動を発信し、理解を深めていく。
・会の価値を高め、若い世代の入会の促進。

委員会担当理事

佐藤　香織（福祉活動委員会・委員長）

社会福祉士会に入会し、多くの学びと経験をさせて頂けていることに感謝しています。

福祉活動委員の皆さんと、日々感じている課題の中から、テーマを決め、意見を交換し共に学びあえる場をつくり、協力し合いながら、横のつながりを築いていきたい。

渋沢　昌記（虐待対応委員会・委員長）

県・弁護士会・社会福祉士会、そして各市町村との連携を図りながら、「権利擁護」の重要性と「虐待防止に向けた対応」が各地区単位でも更に展開していけるよう、委員そして会員の皆さんの協力を得ながら進めて行きたいと思います。

奥原　和彦（広報編集委員会・委員長）

常任理事として５期目となります。新型コロナウイルス感染症が、生活するさまざまな人々との多くのつながりを遮断してしまいました。次期は、長野県社会福祉士会の会員がソーシャルアクションできる広報の役目を果たすべく、会員の皆様の思いや考えを真摯に届けたいと思います。よろしくお願いします。

伊藤　芳子（生涯研修センター運営委員会・委員長）

理事１期目の研修はコロナ禍で全てオンラインだった。その中でも学び続ける会員の意欲を目の当たりにした。今、ようやく、対面で開催できる。顔を合わせ、言葉を交わし共に学ぶ機会を作ることで、会員一人ひとりがもう一度、姿勢を正し、社会福祉士として活躍することを目指していきたい。

北原　俊憲（ぱあとなあながの運営委員会・委員長）

昨年、ぱあとなあ会員の意向調査を実施し、さまざまな思いを抱いて後見活用や権利擁護支援の実践がなされていることを実感しました。

今年度は、集合形式とオンライン形式の運営委員会や専門部会を効率的に開催するとともに、ぱあとなあながの小委員会（仮）を立ち上げ、今後の後見活動の在り方を示していきたいと考えています。

両角　佳子（定着支援センター運営委員会・委員長）

適切な支援や居場所により、犯罪を繰り返さず社会の中で「自分らしさ」を活かした生活が送れるよう、多様な資源による地域支援体制づくりが求められています。

そのためにも、研修会の開催等を通して、定着支援センターの支援や対象者の現状、課題について、より理解を深めご協力いただけるよう取り組んでいきたいと考えています。

地区担当理事

西澤　茂洋（東信地区・支部長）

会員内外のネットワークづくりと学び合いの場づくりを推進します。新規入会者や資格を活用できていないと感じている会員なども会活動に参加できるような学習会・交流会等を開催します。感染症に留意しつつ、会員同士が対面で話し合う機会を増やし、知恵と力を結集して社会福祉士の価値の向上に取り組みます。

押田　　博（中信地区・支部長）

地区活動の目的を考え会員同士がつながり学び合いができる環境づくりを進める。

学習会、交流会についてはコロナ禍の経験も活かしてWebと対面を効果的に使っていく。社会福祉士会の活動を通して会員一人ひとりが福祉専門職としての成長を実感できる取り組みを行っていきたい。

中村　正人（南信地区・支部長）

「つながり」と聞いてそのイメージは一人ひとり違います。社会福祉士会として南信地区の活動は３ブロックの持ち味を活かし、まずは顔の見える関係づくりをしていきたいと考えております。それには会についての興味を抱くことから始め、それぞれが持ち寄る「つながり」のイメージを少しずつ共有することを大切に取り組んでいきます。

本藤　久道（北信地区・支部長）

新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが５類感染症になりました。福祉の業界も医療と同様生命を預かる立場でもあり、まだまだ予断を許さない状況ですが、学習会等については、オンラインからオフライン（オフ会？）へ戻りつつあります。オンオフ織交ぜながら、会員同士のつながりや学びを深める場づくりを進めていきたいと思います。

外部理事

青木　寛文（弁護士）

社会福祉士と弁護士とが連携して、それぞれの専門性を発揮することで支援を必要とする人の幸福を追求する場面は多い。その連携の架け橋となれるように微力ではあるが力を尽くしたいと考えている。

相馬　大祐（大学准教授）

はじめまして。2023年４月より長野大学に着任しました相馬と申します。さまざまな社会課題が表出している現状の中、専門職団体と養成校の連携は、ますます重要になっていくと考えられます。ぜひ、一緒に何をすべきか考え、活動していければと思います。未熟者ですが、ご指導いただければ幸いです。宜しくお願い致します。

監事

青柳　與昌（元副会長）

社会福祉士会の活動が、事業計画に基づき公益性を発揮したうえでさまざまな事業が適切に運営されているか、会員一人ひとりの意見をしっかりと受け止めその意見を十分に反映し、入会したことでスキルアップに繋がる運営になっているかの観点から事業内容を監査していきたいと思います。

社会福祉士のためのICT“使ってみた”セミナー

４月22日、ICT推進プロジェクト２年間の活動の区切りとしてオンラインセミナーを開催。ICTを活用した先進事例について報告があった。

①ICT利用推進自体が目的ではなく手段、②対象となる人が何を求めているのかを把握し、その上でICTを用いることの目的やメリットを明確化し説明すること。また、ICTに限らず③視覚化する等受け取る側がわかりやすくすること等が活用ポイントとして挙げられた。

【事例１】LINEアカウントで包括の情報を発信

蒲　生　俊　宣 氏（上田市　川西地域包括支援センター）

LINEを使った情報伝達の実践について。国内アカウント数も多く、高齢者普及率も上がってきているLINEを広報に活用。管理も簡単で開封未開封の確認可能で一斉送信できる等、実際の操作も併せて説明。

【事例２】開拓した就労先や物件情報をWEBで共有

北　井　孝　文 氏（栃木県市貝町社協　ハートフルいちかい　重層的支援体制整備事業コーディネーター）

業務の効率化、多職種他機関連携のためのICT活用について。内部記録はクラウド上のプログラムに入力することで、外出先でも入力でき共有も容易に。また発掘した社会資源等の情報もWEBで共有。

【事例３】群馬県社会福祉士会としてのICT活用について

小　川　貴　之 氏（群馬県社会福祉士会　副会長、ICT委員会）

社会福祉士会の在り方、会員は何を求めているかをアンケート等で確認しながら、目的達成の手段としてICTを推進。KintoneやLINEWORKSを利用し、会報のペーパーレス化や研修の管理への活用、また会員だけでなく非会員への広報等への活用も検討。

【事例４】災害時の支え合い、個別避難計画づくりをアプリで支援

松　谷　　学 氏（大桑村社会福祉協議会　事務局次長）

県社協が運用する防災福祉アプリの説明と、実証実験に参加してみての報告。

ハザードマップや要援護者台帳等別々に管理されている情報を包括的に把握でき、優先度や緊急度に応じて個別避難計画を策定に活用できる。

2023年度　福祉まるごと学会

～社会福祉士・専門職として、実践を言葉で伝える力を高める！～

福祉まるごと学会は、６月３日㈯に定時総会に先立ちオンラインで開催されました。実践研究発表は２つのルームで６人の会員から発表があり、セミナーでは地域共生社会をテーマに事例報告と講演を行いました。

【講　演】「地域共生社会：孤立を生まない地域づくり」

講　師：**新　崎　国　広** 氏

（ふくしと教育の実践研究所 SOLA　主宰、大阪教育大学　元教授）

社会福祉士会での出会いを経験して、今ここにいるという講師の来歴の説明の後、Zoomのチャット機能で受講者に「あなたにとっての幸せとは？」と意見を募る。「運動している時」「家族そろって美味しいものを食べる」「寝ている時」と多様な意見が寄せられる。多様性（ダイバシティ）と共同性（インクルージョン）が共存することは難しい。連携・協働は手段に過ぎず、目的を明らかにしないと、多くの人が良かったと腑に落ちる“納得解”は形成されがたい。

ソーシャルワーカー・行政職員に必要な支援として①話し上手・聴き上手になる　子どもにもわかる言葉で話す＋雑談力・ニーズとデマンドの違いを意識し、言葉だけではなく想いを聴く　②「助け上手・助けられ上手」になる　自分の得意なこと・できることは積極的に取り組み、苦手なこと・単独で難しいときは、協力・協働をもとめる　③「伴走型支援」を心がける　人生の主人公は生きづらさを抱える当事者・家族であるということを忘れず、豊かな生活の応援団になる　④真の「お節介」になる　節度のある“介”なかだち・コーディネートができる人・目配り気配り心配りができ、他者の困りごとを放っておけない人になる…と説明された。

日本の15～39歳の死因第１位は自殺。児童虐待の相談対応件数は平成２年1100件→令和３年20.5万件と約200倍に。子どもの貧困率の増加も平成29年で13.9%、７人に１人。ヤングケアラー・いじめ・不登校などの社会的孤立も問題視されている。今後も生活困窮者や精神的不安感は増加するものと見込まれる。家庭の養育機能やコミュニティ意識の低下・挨拶や顔の見える関係の弱体化・教育や福祉の無関心化・専門職依存が社会的孤立の深刻化を招いている。「福祉って何？」と質問しても介護・行政・生活保護…という回答ばかり、他人事な様相。セルフネグレクトをサービス拒否者と決めつけず、“近助”の発見力→報告・連絡・相談→多職種で連携・地域で協働→“近助”の見守り力で支援をしていく。

地域福祉のモットーは「敷居は低く、志は高く！」参与→参加→参画の仕組み作りは「▲するのに■入らない」楽しそう・面白そう→私にできることは？・友達や仲間ができる→自分の意見が実現する・自己成長につながる…とワクワクドキドキを大切に。共助・近助を“社会資源”で終わらせず、楽しいと思える仕掛け・呼びかけを考えることも肝要だ。多様性と共同性は違う。分断化されやすい社会。多様性だけ求めたら格差社会になり、協働性だけ求めると息苦しくなる。対話により個々の想いを話し合い、コンセンサスを見つける努力“納得解”をどう創るか？　相手の意見を否定せず「なるほど、そういう考えもあるんですね」と受け止めたうえで“Ｉメッセージ”で意見を言い、当事者・家族の幸せを検討する「Yes＋and話法」で相手の専門性をアセスメントし“納得解”を広げるよう心掛けている。

事例報告してくれた齋藤さんのように、地道に地域と信頼関係を築き、対象を限定せず、思いを共有し、何をすべきかを見つける実践の積み重ねが大切。ちゃんと当事者と向き合っている人が声をあげていかないといけない。手段・方法はそれぞれ違うが「クライアントが笑顔になるために、どうすればいいか」という目的論から入っていく。モヤモヤすることがスタート。次の手が打てる。

【事例報告】「NPO 法人まちの縁側なから」の取組について

報告者：**齋　藤　百合子** 氏

学習塾講師として子供と関わる中で、「子供たちの生きていく力が弱まっている。」と感じ、学校・習い事・家庭以外でさまざまな関わりや体験をするという機会が減少していることが原因だと考えた。昔の家庭や地域社会のように、さまざまな人との関わりが持てるような組織を作ることを志し、2011年にNPO法人なからを立ち上げた。「なから」とは「だいたい」という意味の方言で、完璧でなくてもいいという思いを込めている。

なからは、参加者の要望やアイデアを取り入れながら、縫物教室・こども食堂・手話教室・畑作等々のさまざまな活動を行っている。参加者は子供から大人、高齢者や障がい者等さまざまで、活動を支えるボランティアもたくさんいる。「人を信じること。」を大切に、さまざまな方との出会いから、さまざまなつながりが生まれ、さまざまな関わりが持てる活動の場を展開できている。

実践研究発表

「社会的養護出身の若者応援プロジェクトから見た、多機関連携の有効性について」

発表者：**長峰　夏樹** 会員

児童養護施設等の社会的擁護化で育った若者たち「ケアリーバー」について、2020年に初めて実施した調査から支援が必要な状況が実証された。県内15の児童養護施設で、卒園後も何らかの課題を抱え支援が必要なことが明らかになった。その相談内容は、金銭問題、住まい問題が多い。施設の相談支援体制は脆弱であり、市町村、社会福祉協議会やまいさぽとの連携が必要になっている。地域の相談機関との連携事例として就職活動応援金付き就労体験（プチバイト）の利用を紹介し、地域の相談支援機関との連携や圏域ごとの支援調整機能の確保の必要性を提言した発表であった。

「防災フクシアプリによる災害時要援護者の支援の仕組みづくりの有効性について」

発表者：**橋本　昌之** 会員

長野県社会福祉協議会が自主防災組織や自治会役員等が活用できるデジタルツールとして、「防災福祉カンタンマップ」（災福マップ）を開発した。長野県内26団体で実証実験を行い、災害時要援護者支援へのICT活用のその有効性を明らかにする研究について報告した。災福マップを活用し、平時より災害時要援護者の状況をエリアで把握、関係機関で共有することで、豪雨災害等の水害時の早期避難・逃げ遅れゼロ、地震災害時の効率的な安否確認ができ「災害に強い安心して生活できる地域づくり」に活用できると思われると結んだ。

「T保健福祉圏域地域における法人後見支援の内容と支援の効果について～P市社会福祉協議会の法人受任事例から～」

発表者：**八木　方子** 会員

目的は、先行研究を参考に、開設から７年過ぎたＰ市社協の法人受任の状況における整理、分析を試みるものである。Ｐ市社協成年後見センターが受任した開設時（平成28年４月）から令和４年11月までの33件を対象に、先行研究を参考とし、Ｐ市社協が受任した事例の分析を通じ、Ｔ保健福祉圏域における法人後見のニーズの具体的内容について把握した。結果、先行研究と同様の傾向があることが確認された。既に在宅での独居生活が困難な状況での首長申立による後見（等）申立、受任であるため、キーパーソンのいない複合的な課題を抱えているケースが多いと分かった。

「災害コミュニティソーシャルワークの理論化に向けて」

発表者：**山﨑　博之** 会員

令和元年東日本台風に際し、長野県内では災害ボランティアセンターおよび地域支え合いセンターの設置による継続的な見守り、相談支援等の活動が展開された。地域ささえあいセンターでは、１層（自治会・町内会圏域）、２層（地区・日常生活圏域）、３層（市町村域）ごとに配置された生活支援員相談員のアウトリーチによる継続的な寄り添い支援と地域支援活動が展開された。このことにより被災者の主体的な自立・生活再建および被災地域の主体的な住民活動を支援する災害コミュニティーソーシャルワーク機能が高まった。

「コロナ禍での緊急就労事業による業界移動の考察」

発表者：**岩崎　明弘** 会員

目的は、本事業の成果を業界移動の視点から分析を行い、就労支援３事業の成果と課題を明らかにすることである。令和２年６月から令和４年９月に本事業を利用して雇用につながった249名を対象に、業種間移動の有無、内容、事業の有効性を考察した。新型コロナウイルス感染症に伴う雇用危機への対応において、本事業による「農業」や「福祉」へ業界移動に一定の成果を確認できるが、その後の中長期的な定着状況が課題である。就労支援３事業の成り立ちは、社協をはじめソーシャルワーカーのマクロソーシャルワークの成果と言え、さらなる拡充、発展が期待される。

「自主グループによるグループスーパービジョンの実践報告」

発表者：**和田　健太郎** 会員

職場外の仲間で立ち上げた自主グループにおけるグループスーパービジョンの実践の効果について、グループスーパービジョンの実施前後の自己評価の変化に着目し報告した。質問紙調査からは自己評価11項目中の７項目に実施前後に有意差が認められ、また11項目すべてにおいて、実施前と比較して実施後の中央値が高いという結果が得られた。スーパービジョンは専門技術の向上はもちろんのこと、そこで形成される仲間との絆がソーシャルワーカーとしての財産になる。この実践報告がグループスーパービジョンの普及に寄与できればと考えている。

特集 私の考える社会福祉士、社会福祉士会とは

東信地区

氏　　名：廣　澤　真　一
所　　属：わっこ自立福祉会
居宅介護支援事業所
職　　種：介護支援専門員
業務内容：わっこ自立福祉会は身体、知的、精神障がい分野の支援を行うが、その中にあって介護保険の制度を取り扱う。

①社会福祉士を志した理由

40歳代まで自営業者であったが興味を失い福祉の世界に転身する。業務に必要な介護福祉士や介護支援専門員の資格を取得するが、自身として物足りなさを感じた。大学の頃あまりにも勉強しなかったので、資格取得を目指すこととした。

②社会福祉士としての意気込みや信念

わっこ自立福祉会は当初はわっこの会として1987年５月に発足した。地域の中で障がい者の生きる場・働く場作りを目指していた。障がい者と健常者の仲間が活動を始めた。その後現在に至るが、障がい者と健常者が共に社会の壁を打ち破る姿が過去にあったことを大事にしたい。

③座右の銘または好きな言葉

「台本を物語にしない日常にする。」

武田鉄矢氏がラジオ番組『武田鉄矢 今朝の三枚おろし』で語っていた。松竹映画『男はつらいよ』の撮影で俳優たちは台本はあるが、撮影では一切台本を使用せず演技した。山田洋次氏が監督であった。

台本を私自身の業務におけるケアプラン等に置き換える事ができると感じる。

④社会福祉士会で取り組みたいこと、取り組んできたこと

文化音楽活動。あくまでも夢ではあるが、身体、知的、精神障がい者が取り組む音楽活動を発掘し紹介する。その橋渡しとなる。

北信地区

氏　　名：鈴　木　美奈子
所　　属：社会福祉法人　賛育会
介護医療院とよの
職　　種：介護員 兼 介護支援専門員
業務内容：介護医療院での介護業務全般と介護支援専門員として介護医療院入所者のケアマネジメント業務を行っています

①社会福祉士を志した理由

曾祖母が介護サービスを受けていたことで福祉の分野に興味を持ちました。高校の頃、医療や福祉の資格を調べ、進路を決める際に社会福祉士という資格があることを知りました。将来、介護や相談業務に携わりたいと思い、社会福祉学科のある専門学校に進学しました。

②社会福祉士としての意気込みや信念

現在は高齢者福祉の分野で介護の直接業務とケアマネジメント業務に携わっています。社会福祉士という立場からご本人の今までの生活やこれからの生活への希望を聞くように心掛けています。高齢になり、施設に入所していてもその方らしく生活できるようにお手伝いしていければと思っています。

③座右の銘または好きな言葉

私の座右の銘は「雨垂れ石を穿つ」です。小さな雨の雫でも長い年月をかけて石を砕くことを示している言葉で、普段の仕事の中でも小さなことをコツコツと続けることでいつか成果が出ると信じて取り組んでいます。

④社会福祉士会で取り組みたいこと、取り組んできたこと

研修への参加で自分の知識を深めていきたいと思っています。また、他の社会福祉士会の会員の方とお話しさせてもらうことで自分の携わっていない分野について知ることができるのでさまざまな方とお話してみたいと思っています。

今号は、社会福祉士を志した理由、意気込みや信念、座右の銘、今後社会福祉士会で取り組んでいきたいこと等を伺いました。社会福祉士会は公益法人として各種セミナーや研修を行い、県民生活の支援と権利擁護を図り、誰もが住みよい社会づくりを目指します。これからも、ともに社会福祉士会を発展させていきましょう。

南信地区

氏　　名：高　橋　俊　雄
所　　属：伊那市社会福祉協議会
職　　種：相談支援員
業務内容：生活相談係に所属し、生活困窮者自立支援法（まいさぽ）に基づく相談援助に従事しています。また、生活福祉資金貸付事業を兼務しています。

①社会福祉士を志した理由

昔から保育士になりたいという漠然とした想いがありました。大学選択時、保育士が取得できる学校からチョイスし、「ついでに取っておくか」という軽い気持ちで社会福祉士も取得できる課程に進みました。大学４年時、児童養護施設の内定をもらっていましたが国家試験の勉強を通して相談援助職の魅力を感じました。一度きりしかない人生だしやりたいことをやろうと秋頃に180度方向転換して社会福祉士としての道を選択しました。

②社会福祉士としての意気込みや信念

常に最善を考え続けることを軸としています。相談援助は、良くも悪くも支援の限界を自分で決めることができてしまうものです。客観的にはもう少し踏み込んだ方が良い状況であっても、援助者がゴールと決めてしまえばそれ以降の進展はありません。実際には他業務との兼ね合いで時間に制約があることは事実です。そんな中でも妥協をせず常に相談者の最善を考え続けるスタンスが重要であると考えています。

③座右の銘または好きな言葉

「やるっきゃない」という言葉が好きです。一日に何件も新規相談が入り、夜中まで仕事をしていた時に職場の先輩がつぶやいた言葉です。根性論ですが、当時はこの言葉に何度も助けられたことを覚えています。

④社会福祉士会で取り組みたいこと、取り組んできたこと

社会福祉士として働き始めて６年目になります。しかしながら諸先輩方と比べると視野も狭く、まだまだ未熟であると自覚しています。常に向上心を持ち、自己研鑽に励みたいと思っています。

中信地区

氏　　名：坂　口　　功
所　　属：朝日村役場
職　　種：一般事務等
業務内容：主な業務は、役場住民福祉課の課長補佐・住民福祉係長事務です。高齢者福祉と地域福祉全般・民生委員児童委員会・介護保険事業者運営指導等の担当事務も所管しています。今年度は村内医療体制整備と第９期介護保険事業計画にも取組んでいます。

①社会福祉士を志した理由

生来の整形疾患があり、人の役に立ちたいと思い、大学は福祉学科を卒業しました。大学サークルも知的障がい児の遠足会に参加し子供たちとキャンプに出掛けたり、さまざまな行事を企画運営したことも社会福祉士を志したきっかけです。

②社会福祉士としての意気込みや信念

現任は事務仕事が多く、社会福祉士としての相談対応や研鑽は疎かですが、ソーシャルワークの価値である人間の尊厳の保持と社会正義は、社会福祉士である私の基盤です。また、倫理綱領や行動規範は迷いある時、ソーシャルワーカーの原点に立ち返らせてくれます。

③座右の銘または好きな言葉

「社会福祉士は生き方だ」という県士会の仲間の言葉に共感しています。座右の銘は持ちませんが、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」が好きです。雨ニモマケズ、風ニモマケズ、雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ、丈夫ナカラダヲモチ、欲ハナク、決シテ怒ラズ、イツモシズカニワラッテイル、（中略）、ソウイウモノニワタシハナリタイ。岩手花巻にある羅須地人協会にも行きました。

④社会福祉士会で取り組みたいこと、取り組んできたこと

ひと昔前に10年間程、地区理事、本会幹事や副会長等、さまざまな役員を担当しました。当時は本会以外にも、月例の中信地区学習会や、ぱあとなあ地区学習会を開催し、会員や三士会の交流も頻回で、人の繋がりを広く深く持て、楽しい思い出が多いです。その時できたネットワークは私の財産です。本会に限りませんが、役員や委員を担うことで本来業務で得られない力を培えると思います。ちなみに今年は、諸先輩に担がれ、村のコーラスグループの会計さんを担当しております（微笑）

リレーエッセイ～リレー形式の寄稿～

『いつ起こるか分からない災害への備え』

白　砂　　歩（長野大学社会福祉演習・実習室所属）

上田市川西地域包括支援センターの蒲生さんからバトンを受け、初めてリレーエッセイを寄稿します。こういった文章作成は苦手なのですが、次にバトンをつなぐべく、最近私が感じたことをまとめてみたいと思います。

５月５日に石川県能登地方で最大震度６強の地震が発生しました。私はその時、新潟県上越市にいたのですが、能登から300kmほど離れた上越でも数回にわたり大きな揺れがありました。危険を知らせるアラートと防災無線が鳴る中、地面が横に大きく20秒ほど揺れ、その時間はとても長く、恐怖を感じました。こういった経験をすると、改めて常日頃から防災に対する意識を持ち、備えを行なっておく必要があると身に染みて感じます。地震の後、家族と「もしもの時のシミュレーション」をしてみたのですが、意外と知らないことや決めていないことがあり、ドキッとしました。最近、全国各地で災害が頻発しています。自分だけではなく、大切な人たちを守るためにも、今できる災害への備えを考えるきっかけとしていただければと思います。

写真は記事と関係ありませんが、梅雨ならではワンショット。梅雨が明けると本格的な夏の到来です。皆様、くれぐれもご自愛いただき、こまめに水分を摂って暑い時季を乗り切りましょう！

＊次号は、**長野県社会福祉協議会福祉人材センター　鈴木　敬太さん**にバトンタッチします。

信州ぐるっと!!　～県内の特色ある福祉活動を紹介～

「子ども達が安心して過ごせるために」

片　桐　政　勝（社会福祉法人 アルプス福祉会）

不登校は全国で24万人と言われ、少子化と反比例して増加傾向にあります。つまり、学校を居場所に選ばない子どもが増えていることに他なりません。私自身、わが子の登校拒否という現実に出合い、今、安曇野で親の会の活動を始めています。

県内には不登校の現場で先駆的に取り組んで来てくれた先輩の活動家のお母さんお父さん達がいます。この方々は社会福祉の専門職ではありませんが、ソーシャルワーカーと呼べる方々だと思います。親の会を作ったり、学習会などを企画されたり、ネットワークを構築したり、提言を示したり、支える仕組みがない中で、現場で必要なものを創り出しています。私は、そんな活動家の先輩達に学び、中信地域で出会った松本や塩尻の親の会の仲間達と、親の会の共同団体『ここなら～中信地区心をつなぐ不登校引きこもりネットワーク～』を結成し、社会資源マップづくり、啓発活動、学習会を始めました。

不登校やひきこもりの課題は、子どもの権利に関する社会問題であり、人権問題だと感じています。そして、これこそ社会福祉士の根源的なテーマであると、わが子に教えていただいたと思っています。まだまだ続いている、学校に行く・行かないという議論はやめて、権利の主体である子どもが、安心して笑顔で過ごせるように、社会福祉士として活動していきたいと思っています。

今後の予定

最新の予定は、本会ホームページ（https：//nacsw.jp）をご覧ください。

日　時(曜日)	事　業　名　・　研　修　名	会　　場	備　　考
7月9日㈰	ソーシャルワーカーの使命・専門性・可能性を考えるフォーラム	オンライン	講師：尾上　浩二 氏
7月29・30日	実習指導者講習会	長野大学	
8月6日㈰	基礎研修Ⅰ　第1回	塩尻総合文化センター	
8月26・27日	成年後見人材育成研修　第1回・第2回	松南地区公民館（予定）ほか	

◎ 入会状況（2023年５月末現在）　＊会員数：1,203人　入会率：24.62%　人口10万人あたりの会員数：59.55人

編集後記

2023年度定時総会では、次期役員や委員等の改選および2022年度決算が承認されました。引き続き、広報編集委員会は会員の皆様に顔の見える広報紙をお届けできればと思います。また、行動制限も少しずつ緩和され、今後対面による本会の研修・セミナー等の活動が再開されます。「久しぶりに会ってお話しできるかな？」とワクワクしています。

(M.M)